日本の公共図書館における観光に関する地域外利用者サービスの変遷

藪田　舞香

近年、日本では観光産業が重視されている。それに伴い、本来は地域住民を対象とする公共図書館サービスにおいて、観光客をはじめとする地域外住民の来館を歓迎する事例が多くみられるようになってきた。公共図書館の研究領域では、明示的に観光をテーマとした研究は少なく、1954 年の議論開始から 2010 年までに大きな断絶が存在する。しかしながら、実際には日本の図書館における観光関連サービスは地域外住民の来館を促すサービスとして広く捉えられており、断絶していた時期にも現在の観光関連サービスにつながる事例が複数みられていた。本研究の目的は、これまでの観光に関する地域外利用者サービスの事例を網羅的に収集し分析することで、その特徴と変遷を明らかにすることである。

研究方法は、文献の精読である。調査対象はデータベースでの検索と目視による雑誌記事の探索によって収集した、1950 年以降から現在までの地域外住民の来館が促されるような活動や観光の視点を持った活動に関する事例や議論を扱った文献である。精読を通して、文献に掲載された観光に関する地域外利用者サービスに関する事例や論考を年代と特徴に基づいて分析した。

調査の結果、観光に関する地域外利用者サービスに関する文献として、1950 年から 2009 年までの間に 16 件、2010 年以降に 50 件、合計 66 件を特定した。1954 年に「観光図書館」が提案されたのち、1970 年代に地域外住民の地域資料の利用が確認され、その後、地域外住民を意識した資料整備や観光客への貸出といった基本的な図書館サービスの対象に地域外住民を含める事例が見られた。現在では、観光と図書館には高い親和性があることが示され、図書館において観光に関する活動が広がる一方で、基本的な図書館機能の欠落を懸念する意見も出てくるようになった。また、本研究を通して、公共図書館における観光に関する地域外利用者サービスとして、新たに 6 つの分類が浮かび上がってきた。具体的には、①公共図書館における観光関連サービス全体の議論、②観光目的となる公共図書館、③魅力あるコレクション、④地域情報・地域魅力の発信、⑤地域外住民向け貸出サービス、⑥外部連携による誘客、である。

これらの結果から、公共図書館における地域外利用者を対象としたサービスには、図書館自体を観光資源とするもの、魅力的なコレクションの提供、地域情報・魅力の発信、貸出等の基本的図書館サービスの提供、外部連携による魅力的な企画があることが解明された。さらに、これまで観光と図書館の関連付けは、1954 年の「観光図書館」の提案から 2010 年以降の議論の登場までには断絶があるとされていたが、本研究を通じて着目する図書館活動の対象者を地域外住民へと広げることによって、地域外利用者の受け入れや観光客への貸出といった活動が確認でき、現在の観光関連サービスに繋がったことがわかった。

（指導教員　小泉公乃）